

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

肌感覚としての地球社会を認識するために＜特別研究＞

グローバル地域研究と地球社会の認知地図わたしたちはいかに世界を共創するのか？＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫, 黒田, 賢治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000003

肌感覚としての地球社会を認識するために

西尾 哲夫・黒田 賢治

グローバル地域研究の開拓の背景

2019年末に始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、個人と共同体のつながりを地球規模で根底から揺るがす現象として立ち現れた。個人の実践が地域社会や国家システムを飛び越え地球全体に直截に影響を与える経験をしたことはまだ記憶に新しい。図らずも「地球社会」とは何かを漠然とながら、われわれは経験したのである。こうした地球規模の変動という現象の経験を経たなかで、新たな学問知を構築するためには、必然的に従来の学問に割り振られた領域を超え、さらには学問知を通じた新たな視座を提供することが求められる。こうした試みの1つが、地域研究の地球社会論的転回であるグローバル地域研究という学問領域の開拓である。

1960年代から日本で培われてきた地域研究は、アメリカで培われてきた地政学的な関心から現代の問題に焦点があてられるエリア・スタディーズとは異なる学問的感覚と目標が構想されてきた。そして方法論の再検討に加え、既存の地域区分に対しても認識論・存在論的な再検討を通じて研究対象とする地域の再設定もなされてきた。こうした試みによって一方では超域的で学際的な研究が精緻に積み重ねられてきたが、他方で地域研究そのものの専門分化を促すことにもなった。

1990年代以降、グローバリゼーションとして、ヒト・モノ・カネ・情報、さらには環境をめぐる急激な地球規模の変動が起きてきた。そして個人がアクセスできる知識と公共的コミュニケーション空間の変容や、ローカルな生活空間とグローバルな社会空間の接合といった新たな変化が生み出された。かかる状況に地域研究として取り組むとすれば、グローバリゼーションの地域的展開を研究することでは不十分であり、ある地域の事例を人間の普遍と文化的特殊を同じ位相のなかで捉えていくが必要になるのである。それは全く新しい試みではなく、むしろ地球社会という総体を個別の事象から捉えようとしてきた梅棹忠夫の『文明の生態史観』（1967）のような先達た

ちの取組みを継承する試みでもある。

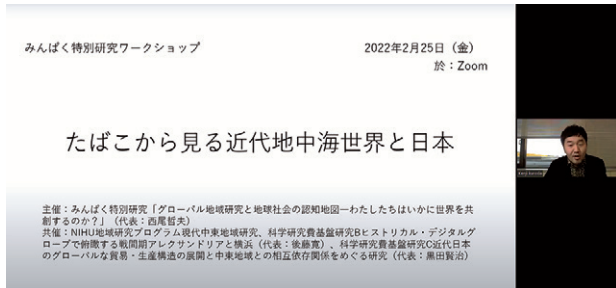
こうした問題意識に基づいたグローバル地域研究の開拓のため、文化や社会の再定義を行いつつ、文化往還や地球社会をめぐる認知に焦点をあてた共同研究を行ってきた。

オンラインから対面へ、そして新たな課題に

対面的な関係が制限されると同時に始まった本共同研究は、非接触的なオンラインでの研究会の開催を選択せざるを得なかった。そこで初年度目からグローバル地域研究の理論的考察を行うために研究分担者とオンライン研究会を重ね、2年目には館内のコアメンバーが中心になり順次オンラインで国際ワークショップを開催していった。ようやく行動制限に緩和の兆しがみえつつあるなか、3年目には総合地球環境学研究所との共催でシンポジウム『「文明の生態史観」と地球社会』、国立民族学博物館グローバル地域研究プログラム（グローバル地中海地域研究拠点・プログラム総括班）などとの共催で国際シンポジウム「井筒俊彦の東洋哲学を再定置する」を開催した。そしてこれまでの議論の総括として対面での国際シンポジウムThe International Symposium of Minpaku Special Project “Global Area Studies: Towards a New Epistemology for Mapping the Globalizing World”を2日間にわたって国立民族学博物館を会場に開催した。



The International Symposium of Minpaku Special Projectの様子（2023年3月、国立民族学博物館）



オンラインワークショップ（テーマ：オリエンタル煙草と日本）の様子（2022年2月、オンライン）

加えて、一般社会に対しても本共同研究で取り組もうとしてきた研究課題の重要性について周知してきた。初年度には、みんなく公開講演会「ファンタジーの挑戦—もうひとつの世界を想像しよう」（主催・国立民族学博物館／日本経済新聞社）を共催し、3年目には第40回人文機構シンポジウム「人類妄想進化論—文学はいかに地球社会を共創するのか？」を共同事業として開催した。いずれもハイブリッドでの開催であったが、人間の内面世界と地球規模の現象との関係性を扱う方法論的視座について作家の森見登美彦氏とともに示すことができた。

こうしたオンライン・ツールを利用したオンラインあるいはハイブリッドの研究集会を行ったことは、本共同研究の着想の1つと重なりをもつものでもあった。それはグローバル化とデジタル化の急加速による、グローバルデジタル環境の出現である。

われわれはコロナ禍という要因によってグローバルデジタル環境のなかに研究活動を置かざるを得なかったが、そうであるがゆえに対面での開催以上に多くの研究者、一般市民らが参加することができた。これまで設備によって制限を受けていた同時通訳や手話通訳の利用が格段に緩和されただけでなく、発言の字幕生成といった新たな機能を利用することで、一見すると「言葉の壁」を超えやすい環境が生まれたように思われた。おそらく今後もメタバース（仮想空間）というかたちなどで、ますますグローバルデジタル環境の整備も進み、共同研究の方法も変化していくことが予想できる。

しかしながら、この環境整備が文化と地球社会をめぐる状況に与えてきた影響は必ずしも楽観的なものではない。近代的個人と地球社会の間の空間域が流動化し、既存の価値（在来知や文明的価値）の資源化、社会のさまざまなアクターの

西尾 哲夫（にしお てつお）

国立民族学博物館名誉教授。専門は言語学、アラブ研究。アラブ遊牧民の言語人類学的研究やアラビアンナイトの比較文明学的研究に従事。著訳書に『ガラン版千一夜物語』（全6巻 岩波書店 2019～2020年）、『ヴェニス商人の異人論—人肉—ポンドと他者認識の民族学』（みすず書房 2013年）などがある。

黒田 賢治（くろだ けんじ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部助教。専門は文化人類学、中東地域研究。現代イランの政教関係や近代日本と中東・ムスリム世界との歴史人類学的研究にも従事。著書に『戦争の記憶と国家—帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』（世界思想社 2021年）、『イランにおける宗教と国家—現代シーア派の実相』（ナカニシヤ出版 2015年）などがある。

地球社会の構成員化を生じさせてきた。そのためミクロな人間の内面性のなかで創出される地域性とマクロなグローバル空間との連関で捉えるアプローチが必要となる。それは異なる心性の心性がどうやって違いを超えて地球社会の共創のために協働できるのかという人類をめぐる問いでもある。そしてそれらについて共同研究を通じて、同時代的な観点からだけでなく時間軸を再設定しながら方向性を探ることができた。

動き出したグローバル地域研究

グローバル地域研究は一朝一夕の試みではなく、これまでの地域研究、とくに人間文化研究機構が実施してきた地域研究事業での研究蓄積を背景としている。上述したような問題群に対して地域研究の次の展開が可能なかどうかを問うことが本共同研究の役割でもあった。そして既に本共同研究の試みは、海外の研究者からも今後の展開が注視されてきた（Obuse and Salvatore 2022）。その意味では、本共同研究のコアメンバーが企画立案の中心となり、『民博通信 Online』7号で紹介したように第4期の人間文化研究機構における地域研究事業として「グローバル地域研究」プログラムが立ち上がり、始動していることは1つの成果とも言える。

グローバル地域研究の目的や方法論、理論的視座についてはまだまだ暗中模索と言ってよいだろう。しかしゼバスティアン・コンラート（2021）が語る歴史学におけるグローバル・ストーリーの試みと同様に、グローバル地域研究という思考様式が新たな研究分野の開拓へと繋がっていくことを期待する。

引用文献

- 梅棹忠夫 1967『文明の生態観』東京：中央公論社。
 コンラート、S. 2021『グローバル・ストーリー—批判的歴史叙述のために』小田原琳訳、東京：岩波書店。
 Obuse, K. and A. Salvatore 2022 Middle East or "Middle Earth"? "Re-orienting" Orientalism and Globalizing Area Studies. In A. Salvatore et al. (eds.) *The Oxford Handbook of the Sociology of the Middle East*, pp. 857-876. Oxford: Oxford University Press.